

書評と紹介

古川美佳著

『韓国の民衆美術』

——抵抗の美学と思想』



評者：真鍋 祐子

今、韓国民衆美術がひもとかれる意味について『韓国の民衆美術』は、いまだ日本でまとまった記述のなかった韓国における民衆美術の構築過程を、植民地下朝鮮にまで遡りながらひもといた浩瀚な書である。本書の要旨は次項で紹介するが、それに先立って、まず今の日本で改めて韓国民衆美術がひもとかれる意味について述べておきたい。

2015年12月末、日韓外相により日本軍「慰安婦」問題に関する日韓「合意」が突然発表されたことで、ソウルの在韓日本大使館前に設置された《平和の少女像》がにわかに脚光を浴びた。昨年8月には、あいちトリエンナーレの「表現の不自由展・その後」に出品された同作がテロ予告の呼び水となり、同展は開幕後3日で中止に追い込まれ（閉幕1週間前に再開）、内外からの注目を集めた。その際、著者の古川美佳氏は朝日新聞（10月23日付）のインタビューに対し、民衆美術という背景から《少女像》を捉えることの重要性を語り、作者にとって韓国という国家はむしろ抵抗の対象であり、「反日」や「ナショナリズム」で動いているわ

けではない、と民衆美術の立場を代弁している。

こうした一連の事態は、近年の日本社会を覆う歴史修正主義とヘイトクライムに加えて、表現活動全般に対する無理解と無教養、隣国の歴史と文化・芸術への無知と無関心、ひいては根深い差別意識が引き起こした恥ずべき出来事といえる。

そもそも、あの《少女像》はどうやって生まれたのか？

日本人の大多数による「反日」「ナショナリズム」という受け止め方と、作者たちの制作意図とはどのように違うのか？

たとえば、そんなささやかな疑問からでも、本書が一人でも多くの手にとられ、読まれることを願いつつ、筆を起すことにしたい。

本書の構成と要約

「はじめに」で、著者は韓国の民衆美術を次のように定義する。

「民衆美術とは、1980年代、韓国の反独裁民主化運動と呼応して生まれた美術運動であり、独裁政権の継続および急速な産業化・社会構造の変化によって顕在化した政治的抑圧と社会的矛盾を、『歴史の主体は民衆である』という立場から表現しようとしたリアリズム美術である。」(vi頁)

ちなみに「民衆美術」という名称は、1985年7月に〈ソウル美術共同体〉が中心となって企画した「韓国美術20代の力」展に対する弾圧事件がきっかけだった。警察は展覧会場を強制封鎖し、美術家19人を連行、作品26点を押収しただけでなく、「不純不穏分子たちが民族だ民衆だと騒ぎ立て、美術界を混乱させようと

した」として、新聞などを使って弾圧キャンペーンを展開した。これは美術家たちにとって分断以降、公権力の弾圧に初めて対峙した出来事だったが、当局が「不純不穩分子」に対して「民衆」と名指ししたことから、彼らは逆に公式名称として「民衆美術」を名乗り始めたという（44-45頁）。これは同時期の運動家たちがあえて「アカ」を名乗ることで、自身の運動を対抗評価的に価値づけようとしたのと同様、公権力による貶価の名づけを篡奪し、逆転的に用いたという点で興味深い。

本書は6つの章から成っている。

第1章「韓国の民衆美術とは？」では、学生たちが中心となり初代大統領・李承晩の長期独裁政権を倒した1960年の「4・19革命」を契機とした民衆美術の萌芽から、80年の5・18光州民主化抗争をへて、5・18後の民衆美術運動の胎動にいたるまでを射程に収める。なぜ4・19学生革命が民衆美術運動の画期かという点、それは未完の革命ではあったが、国の政治を糺して刷新し、社会を変革するために「学生自らが立ち上がった一種の革命」であったからだ。また4・19を通じて強調された「民族文化、民族文学、民族主義的文化」はその後の文化運動へと拡大し、1960～70年代、デモや集会で、仮面劇、マダン劇、ブンムル（農楽隊の鳴り物）やクツ（シャーマン儀礼）など、朝鮮民衆の伝統的な文化様式が取り入れられ、民衆美術運動の端緒を開いた。

第2章「民主化運動の本格化と民衆美術の拡大」では、5・18以後の民主化運動のなかで学生美術運動を端緒とした民衆美術が、まず「理論と実践の統一」を求めて理念を模索したプロセスと、それが1987年6月抗争に結実するまでを記述する。次いで「画壇よりも美術現場へ」を合言葉にした美術運動が、各地域運動組織を拡大させ、なおかつ労働運動と結びついた

大衆美術闘争へと展開していく過程をひもとく。

著者は本章の結びを、「そもそも民衆美術は、当局による弾圧にはじまり、皮肉にも弾圧によって自らの役割を確認し、力を結集し成長してきたという側面がある」（74頁）と書き起こし、「この時代の政治が表現者の生になだれこみ、美術として生まれるほかなかった」（81頁）と述べている。すなわち民衆美術とは「韓国人の自生的かつ自前の文脈のなかで生まれた」（vii頁）ものであり、手法や様式の追求を至高とする「芸術のための芸術」とは対極に位置する。民衆美術に投影された「抵抗の美的表現」は、表現者たちに血肉化された朝鮮民衆の受難と抵抗の歴史の表象であり、かつこれを内破しようとする「手ずからの美的探究の成果」（vii頁）なのである。

第3章「民衆美術の土壌から巣立った女性たちの美術、フェミニズム・アートへ向けて」では、男性主導の民主化運動、美術運動のなかでかえりみられることの少なかった女性美術家たちによる、「女たちの『記憶されない記憶』を描く作業」（83頁）に光を当てる。嚆矢となったのは1980年代初めに共同のアトリエを構えた3人の女性画家で、86年に開いた3人展で初めて、女性問題を提起するという意味を込めた「女性美術」が掲げられた。その活動は同時期に興隆した「慰安婦」問題や女性労働者問題など、さまざまな女性運動団体とも結びつきながら、自生的なフェミニズム・アートへと昇華されていった。著者は次のように指摘する。

「韓国の女性（主義）美術は、儒教思想にもとづいた厳しい家父長制と階級差別の上で抑圧的な生を強いられる女性たちが、フェミニズムの情報も十分に入らない状況下でその現実目覚め、民主化の過程で生まれた。」（95頁）

ここにもまた「手ずからの美的探究の成果」

が見てとれる。

第4章「抵抗の表現，そのキーワード」では，民衆美術における韓国的リアリズムの根源を植民地下朝鮮におけるプロレタリア芸術運動にまで追い求め，現在にいたるまでのリアリズムの表象と論理を跡づける。また民衆美術の論争と論点を整理し，その表現様式と朝鮮伝来の文化との関連性を探りながら，民衆美術の思想や美意識にアプローチする。そうして著者は，韓国において伝統とは，「再生のための破壊の行動と結びつく躍動的な美と情動の宝庫であったこと」(ix頁)を発見する。いかえれば，「民衆美術は歴史遺産への再解釈をとおして，歴史主体としての民衆の位相を再発見し，現代の時空間に新たに創造しようと試みたのだ」(141頁)ということだ。

民衆美術家たちによる「かたちこめられた探究」には，(1) ノリ(遊び・遊戯)，(2) 巫儀・祭儀，(3) 扇動宣伝が，まず大まかなかたちとしてあり，さらに民主化運動のなかで開発されたメディアとしての扇動宣伝のツール，すなわち「新たな変革のかたち，時代に応える形態」として，(1) コルゲ・クリム(掛け絵，垂れ幕絵)，(2) 巫神図・巫俗図と符籍(護符)，マンジャン・クリム(挽章画)，(3) キップル・クリム(旗絵)，(4) 民画，(5) 壁画，壁絵，(6) イヤギ・クリム(絵本・ものがたり絵)，トゥルマギ・クリム(巻物絵)，(7) チャンスン，ソッテといったアイコンが，民衆美術における「抵抗の表現」を読み解くキーワードとなる。

第5章「民主化政権以降の民衆美術」では，民衆美術が1990年代以降の民主化政権下でどのように引き継がれ，さらに「デモの表象」として2016年秋からの「ろうそくデモ」に代表される市民運動にどう結びついたか，加えて富山妙子や針生一郎らが担った日韓連帯をはじめ

とする「外から照らす民衆美術」の側面にも議論が及ぶ。

著者は「ろうそくデモ」について，これを「想像力の領域の表現行為」と捉え，「表舞台の政治を，その裏の死の領域——言葉にならなかった魂の生成から逆転させる表現行為であり，政治的想像力のあらわれ」と捉える。つまり，それは「政治的な死を政治的な想像力によって忘却から救い，人びとの心に刻み，不当な現実立ち向かう」ことである(197-198頁)。ろうそくデモによって朴槿恵政権が倒された後も，4月になれば済州4・3事件(1948年)が，4・16セウォル号惨事が，4・19学生革命が，また5月は5・18光州民主化抗争が，これまでと変わらないサイクルで営々と描かれ続ける。民衆美術は過去の産物ではなく，現在進行中のものとして実在する。政治的な死を言葉にならない言葉をもって記憶し，心に刻み続けることで，それは朝鮮民衆の痛みそのものを治癒しようとする巨大な社会変革のうねりを生成し続けるのである。

最後に，第6章「東アジアのアーキタイプ——生命と霊性の新しい美学へ」では，そうした「消されてきたどす黒い記憶を直視し，無名無数の朝鮮民衆の無意識層に蓄積された恨や悲哀の記憶のたたかいを浄化しよう」と(224-225頁)する治癒のメカニズムを，民衆美術が内包する霊性という観点から解明する。そして民衆美術運動において抵抗の力を支えてきた霊性のありかとして，弥勒信仰，朝鮮巫教(シャーマニズム)，東学思想といったエートスが地下水脈のように流れていると指摘する。それは弥勒の世を，死穢を超えて浄化された魂を，あるいは後天開闢を「まだ見ぬユートピア」として切り拓こうとする律動的な力を生み出す。そこに著者は「欧米の芸術の概念とは質的に違う，わが身，わが心の言葉で獲得したこの求道の美

学」を見出しつつ、それが「韓国の自生自前のリアリズム」だと指摘する（227頁）。そして東アジアの美学にも通底するであろう普遍性と、大きな希望と可能性がそこに示されているのだと結論する。

「人間としてどう生きるか」の問い

著者は、1987年6月抗争の直後、民衆美術が強烈な視覚言語とともに韓国現代史の表舞台に立ち現われて、民主化運動を駆動する局面に遭遇した同時代の目撃者である。「デモを鎮圧する強烈な催涙弾の匂い、戦闘警察（機動隊）の織り成す壁、ざわつく市民の足取り……そんな空気」を体感しつつ、そこに「熱を帯びた『何ものか』」（275頁）を感得するという得難い経験は、本書に余すところなく反映されている。つまり民衆美術のありかをその靈性にまで掘り下げて考究する一方で、いまだ記憶に新しいろくそくデモなど次世代への連続性までも射程に収めつつ、民衆美術が内包する普遍性を見事に照射した。

そうした普遍性について、本書では、たとえば次のように記述される。

「民衆美術運動に一貫して流れていたのは、高邁なイデオロギーや理論などではなく、人間に対する信頼——互いをつなぐ信頼の情とでもいべきものではなかったろうか。」（82頁）

「（女性美術の：評者注）女性たちの軌跡をたどっていくと、（略）権力や権威志向とは程遠い人間としての誠実さ、痛みを分かちあおうとするあたたかさ、そして屹立した強さが伝わってくる。」（107頁）

人間に対する信頼、人間としての誠実さ、あたたかさ、屹立した強さといった民衆美術運動の資質は、朝鮮半島という磁場で生きられてきた朝鮮民衆の歴史的経験にまで遡及される一方で、そこから再帰された「政治的想像力」は私

たちにも希望を与えうる普遍的な価値ではないだろうか。だが、人の死と生をめぐる「政治的想像力」をもちうるか否かは、自らの生き方が問われることでもある。事実、著者は「あとがき」で、「政治的言説をはぎとり、その抵抗の表現の内側に突き抜けてみえてくる韓国・朝鮮民族の美意識」を探るといふ本書での作業は、「人間としてどう生きるか」という自問自答の連続となったと明かしている（275頁）。

「人間としてどう生きるか」という問いの先に見出される一筋の希望は、普遍的な「政治的想像力」という点である。本書に紹介された木版画運動をめぐるエピソードのなかで印象に残ったものが2つある。ひとつは1980年代前半の民衆美術運動の胎動期、美術家たちがブラジル人のパウロ・フレイレの『民衆教育論』などを参考に、版画を使って大衆との接点を作るための「市民美術学校」を構想していたこと。フレイレの教育思想は1970年代初め、韓国自生のキリスト教神学である「民衆神学」で紹介されたが、すぐに発禁となる。70年代半ば以降、それは「意識化」という用語とともに労働夜学で広く受容された*。そしてもうひとつは、「市民美術学校」の活動は1930年代中国における魯迅の「木刻運動」と通底するものであったが、当事者たちが魯迅の活動を知るのはずっと後になってからだった、という事実である。

パウロ・フレイレにしても魯迅にしても、苛烈な反共政策が敷かれていた当時の政治状況下で、その書物に触れることはきわめて困難だったと考えられる。にもかかわらず、美術家たちがフレイレに共感したり、時空を超えて魯迅と共振しあったりすることのシンクロニシティをどう受け止めるか？ これはフェミニズムの情

* 浅野かおる「韓国軍事独裁政権下での夜学における民衆の学習・教育に関する研究」科学研究費助成事業・研究成果報告書、2014年6月。

報も十分に入らない状況下、同時期の女性美術家たちが、儒教思想にもとづく家父長制社会のなかで抑圧されてきた女性の生の現実に目覚め、女性美術の実践を通して抵抗を試み始めたこととも重なる。西欧の理論とは隔絶された場所に自生した韓国の女性美術は、しかし確実に同時代のフェミニズムの思潮とシンクロしている。「人間としてどう生きるか」「女性としてどう生きるか」は時代や国境を超えて普遍的な問いであり、そこに私たちは一縷の希望を見るのではないか。

だが一方で、政治的死者を記憶に刻み、自身も苛烈な政治的弾圧を受けながら、それでも抵抗をやめずにきた韓国の民衆美術家たちの実存をかけた闘いは、おのずと日本人である私たち

に鋭い切っ先を突き付ける。民衆美術運動の原点が民族分断にあり、また美術家たちがその「抵抗の美学」を汲みだす源泉には、日本帝国主義に対する抵抗の近現代史があるという点からも明らかのように、それはポストコロニアル状況のなかで私たちが今なお向き合い続けなくてはならない問題でもある。つまり、私たちもまた実存をかけて、民衆美術が投げかける朝鮮民衆の痛みを自らの痛みとし、「人間としてどう生きるか」を問われるべき存在なのではないだろうか。

（古川美佳著『^{ミンジュン・アート}韓国の民衆美術——抵抗の美学と思想』岩波書店、2018年4月、xvi + 279 + 4頁、定価3,400円 + 税）
（まなべ・ゆうこ 東京大学東洋文化研究所教授）

有斐閣 出版案内

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17/Tel.03-3265-6811
<http://www.yuhikaku.co.jp/>
(表示価格は税別。消費税込みの金額が定価です。)

◎図書目録送呈◎

グローバル経済の歴史 予価二六〇〇円
〔有斐閣アルゴ〕
 河崎信樹・村上 衛・山本千映著 ヒト、カネ、モノ、情報移動はどのような世界から始まり、いかに経済を推し進めてきたのか。そしてどこへ向かうのか。長期的・広域的な視野で学ぶ。
二〇二〇年八月刊予定

日本政治史 予価二二〇〇円
〔有斐閣ストウディア〕
 清水唯一朗・瀧井一博・村井良太著 私たちが暮らすこの日本は、どのように形作られてきたのだろうか。幕末・維新期以来の日本政治の歩みをたどりながら、現代日本の来歴を学ぶ。
二〇二〇年刊

問いからはじめる社会運動論 予価二〇〇〇円
〔有斐閣ストウディア〕
 濱西栄司・鈴木彩加・中根多恵・青木聡子・小杉亮子著 気候サミットと世界中で呼応した若者のデモは記憶に新しい。近年あらためて注目をあつめる社会運動について研究する方法を探る。
二〇二〇年刊

社会運動の現在 予価三五〇〇円
〔有斐閣アルゴ〕
◎市民社会の声
 長谷川公二編 反原発、反ヘイトスピーチ、ハラスメント対策など、さまざまな社会運動を総覧できる基本テキスト。海外の事例と比較することで、日本の社会運動を相対化し、課題を分析する。
二〇二〇年刊

ロビイングの政治社会学 予価四三〇〇円
〔有斐閣アルゴ〕
 原田 峻著◎NPO法制定・改正をめぐる政策過程と社会運動（NPO法の成立・改正過程に注目し、そこに大きく影響した社会運動（ロビイング）を、多様な関係者へのインタビューと豊富な文書資料をもとに分析。ロビイングの存立条件・戦略と帰結を、社会学の観点から明らかにする。
二〇二〇年刊

ストーリーで学ぶ地域福祉 予価三三〇〇円
〔有斐閣ストウディア〕
 加山 弾・熊田博喜・中島 修・山本美香著 はじめて地域福祉を学ぶ人が 楽しみながら実際に地域の活動に取り組む第一歩を踏み出せるよう工夫。社会福祉士国家試験に対応。
二〇二〇年七月刊予定

BLの教科書 予価二四〇〇円
〔有斐閣アルゴ〕
 堀 あきこ・守 如子編 BL（ボーイズラブ）の歴史や研究の方法論、社会との関わりなどをジェンダー視点を重視して整理したBL研究入門。BLをテーマにした卒論や修論の執筆に最適。
二〇二〇年七月刊予定

日本政治史

社会運動の現在

ロビイングの政治社会学

ストーリーで学ぶ地域福祉

BLの教科書

88

大原社会問題研究所雑誌 No.742/2020.8